金沢に生きる家。
金沢で生きる伝統。

伝統を塗り、技を守る。

長町武家屋敷の土塀や、町家の朱壁や群青壁など、建物に金沢らしい表情をあたえてきた左官職人。その金沢で半世紀に渡り、左官業を営む有限会社藤田左官。二代目社長であり、全国左官を考える会の代表でもある藤田秀紀氏と、ほそ川建設社長・細川顕司が伝統技術の継承などについて語りました。

未来へ左官壁を継承させるために。

細川　藤田社長は、全国的な団体でもある、左官を考える会の代表もされていますね。

藤田　淡路の左官をされている方が、左官職人が減少していることや、伝統工法をまったく知らない人が増えてきていることに危機感を感じたことから十年前に発足した会なんです。それで四年前に代表を継ぎまして、今年で五年目になりました。

細川　左官の伝統工法とは、どんな工法なんですか。

藤田　左官は、土や藁、砂だけを混ぜた泥を使って塗っていくのが本来なんですが、今ではメーカーによる既調合の材料がありまして、水を入れるだけで誰でも簡単に作ることができるんです。ただ壁に泥を定着させるために、自然素材でない物も使用されていることがあるんです。

細川　たしかに、メーカー品は自然素材をイメージさせていますが、実際は化学成分が含まれているものが多いですからね。だから、ほそ川建設ではお客さまの健康のためにも天然漆喰を使った住まいづくりを提供したいという想いで、「漆喰づくり」ネットワークを始めました。

ほそ川建設
代表取締役　細川 顕司
1978年金沢市生まれ。大学卒業後に㈱大林組に入社。2008年にほそ川建設に入社し、2015年から代表取締役社長に。

㈲藤田左官
代表取締役　藤田 秀紀
1973年生まれ。2007年より代表取締役。石川県内の左官はもとより、名古屋市内の高級車販売店の天井装飾も手がける。

壁仕上げの選択肢としての左官壁。

細川　左官の担い手が減っていると言われていましたが、それは住宅会社の責任もあると思うんです。最近の住宅は工期短縮やコスト重視でパターン化されていて、クロスなどのメーカー品から色や柄しか選べない事が多いんです。本当は、土壁や漆喰の左官壁を選んで頂けるようにしたいと思うんです。

藤田　工期を二、三週間のばしてもらえれば大丈夫なんですけど、短い工期を望まれる事が多いですからね。ただ最近では、リフォームされる際に、クロスの上から漆喰を塗る事が増えてきました。クロスだとジメジメ感を感じると思うんですが、漆喰は調湿しますので空気感が変わったことを実感できると思います。

細川　そうやって左官壁が見直されることで、左官の担い手が増えて、職人の育成と技術の継承につながるといいですね。

伝統をさらに進化させる未来工法。

藤田　古い蔵や文化財などの修復の仕事もあるんですが、中には以前にひどい修復をされている物もありました。本来、土壁の骨組みとなる小舞には麻や藁を巻きつけるんですが、ビニル紐が巻きつけてあったんです。

細川　ビニル紐は劣化しやすいですからね。そう思うと自然素材を使ってきた本来の伝統工法を伝えていくことが大切ですね。

藤田　伝統のよい部分をさらに良くして、未来につなげていきたいと思います。それが私たちの言う「未来工法」なんです。また塗るものに関しては、すべて左官の仕事だと思っているので、いろんなことに挑戦していきたいです。

細川　私もただ守るだけでは伝統は守れないという想いでして、伝統を踏襲した現代の金沢らしい住まいをつくっていきたいと思います。